

**高岡ロータリークラブ**

会長／西村博邦 幹事／竹中伸行


 2018/2/8  
 ローターリー：  
 変化をもたらす No. 29
**Rotary: Making A Difference**

例会日：木曜日 12:30～13:30 創立：1951/11/15 チャーターナイト：1952/4/15 創立順位：No.68

司会 中川 会場監督 点鐘 西村 会長

国歌斉唱／ロータリーソング

ロータリーの目的 朗読／四つのテスト 唱和

ゲスト 富山県腎友会 中 秀晃 氏

会長挨拶／報告

## ■誕生祝

浅野 浩一君〔2/9・53才〕

福島 晴夫君〔2/10・70才〕

柳澤 剣治君〔2/11・53才〕

小竹 晋吾君〔2/13・60才〕

## ■幹事報告

■配布⇒ガバナー月信 2月号

米山寄付の確定申告用領収書

■親睦麻雀大会⇒本日 14:30～ 健康ランド“遊湯”

送迎車は 13:40 HN オーク高岡前発

■二口洋会員の送別会の案内

## ■委員会報告

&lt; ニコニコBOX &lt; 8件 36,000円 &gt;

中様／本日の謝礼をニコニコBOXに寄付いたします。

西村会長／56豪雪以来の大雪のなか本日、中 秀晃さんには透析について詳しくお話ししていただければと思います。

伏江副会長／富山県腎友会 中 秀晃さん、ようこそ高岡RCへ。卓話よろしくお願します。親睦麻雀大会、哲ちゃんの大連覇を止めるのは…？

竹中幹事／富山県腎友会、中 秀晃さん本日の卓話宜しくお願します。

加藤君／高校時代の同級生、中君ようこそ。卓話楽しみにしています。

柳澤君／誕生日祝い、ありがとうございます。

稲田君／中さん、ようこそ高岡ロータリークラブへ。

いつもバス協会でお世話になっております。

吉田君／皆出席お祝ありがとうございます。



## ■本日のプログラム■

## 卓話

 「富山県腎友会の歩み」  
 ～約40年前の透析の実態から～  
 中 秀晃 氏

富山県の腎友会活動も、約40年を迎えようとしています。近年は、透析患者の高齢化に進み、患者会活動への理解が浸透しにくくなり、当初100%近くあった組織率も大きく低下しているのが実態である。正直、今の透析患者への医療技術に始まり医療費を含めた保障体制は、非常に充実したものになっており、近年導入した患者には、今の体制が当たり前に見え、このまま一生続くものと勘違いをしている方が多く、患者会活動への関心が薄れてきています。そういう中で、今一度、腎友会活動の設立当初の状態を振り返り、今ある環境を得るまでの活動の意義を認識し、これからの腎友会活動をいかに進めるべきかを考えているところです。

## たくさんさんの死～そして、透析始まる

昭和41年ごろにアメリカから日本に透析の機械が輸入され、名古屋の中京病院で最初の透析が開始、その後、全国数か所の大学病院でも導入されるようになっていった。その後、数年の研究が重ねられ、昭和45年5月23日、富山県で初めての透析が富山赤十字病院で始まりました。この当時、富山県では、腎不全による尿毒症で亡くなる方が、年間100名を超えており、「1年に100人助かる」と新聞記事にもなりました。透析が始まったとはいえ、当時の透析器は、現在に比べれば、非常に稚拙な機械で、効率も悪く、1回に8～10時間程度が必要であり、また、故障、膜の破れ等も多発し、当時の透析医の話では、「さながら野戦病院のようだった」とのこと。ただ、治療の効果は明らかなので、一人でも助けるためにと必死だったとのこと。

## 高額な医療費

透析が始まったが、その中で、更に大きな問題だったのが医療費、血液、透析、食の3つでした。中でも透析医療費が高額であったこと、当時、健康保険被保険者は負担がなく高額な透析医療にも耐えられたが、扶養者や自営業の国民健康保険の方々は、3割負担、富山赤十字病院までの通院（通院は、今も大きな問題になっている。）と医療費で月30万円以上払わなければならなかった。当時、48歳サラリーマンの月収が12～13万円の時代に月30万円の負担が永遠に続くとなると、到底生活が成り立ちません。そんな中、医療費の負担に耐えかねて、自殺する方が増え（2年で10人）、何

とか透析を続けた方の中には、田畑を売りつくしてまで支払った方も多くいたそうです。当時、透析患者の中で新潟県から富山赤十字病院へ通院されていた「太田正雄」さん（富山県腎友会の設立に関わり、10年間事務局長を務められる。）が、病院側との協力の中で、透析患者の医療費というものを考えなければ、生きていけない、国の政策をよくしなければ、せっかくの治療法も役に立たず、助かるはずの患者も助からないと、県会議員や代議士に働きかけようと数人で相談を進めている中で、その中の奥さんが病気と医療費等の問題を苦に、富山赤十字病院の5階から飛び降りて亡くなってしまった事件があったそうです。この報道を受けて、当時の件の厚生部長が原因調査のため、赤十字病院に来られ、その機会をとらえ、太田さんたちは、「これは結局医療費の問題である」と訴えたのです。その後、北日本放送が太田さん以下のメンバーであった渡辺さん（人工腎臓友の会初代会長）が15分番組に出演、医療費の問題について、番組内で当時の厚生部長に再度、強く訴えたのです。これがきっかけで、富山県としての医療費に対する補助が決まっていったのです。当時のメンバーがいうには、もしあのタイミングで飛び降り自殺をした患者さんがいなければ、富山県の医療問題は遅れ、2〜3年は、苦しんでいたろう、そういう意味では、あの自殺者は、残されたみんなの犠牲になった人です。

### 「人工腎臓友の会」の立ち上げ

県を動かすだけでは、根本的な解決にはなりません。昭和45年に中京病院に患者会が立ち上がり、富山県でも、富山赤十字病院で「人工腎臓友の会」が発足し、当時の新聞紙上、テレビでも取り上げられました。その後、各県に立ち上がった腎友会から全国組織を作ろうとの動きが進み、昭和46年5月に全国組織が旗揚げされ、富山県も加盟したのです。現在、障害者として、更生医療の適応を受けている透析患者ですが、それに至った経緯は、県や市の地方公共団体に様々な要望を各県単位で進めていたが、医療は国の管轄であり、なかなか動かない中で、全国組織からの働きかけの中、当時の厚生大臣の塩見大臣が、医師で透析医療にも携わったことのある方で、透析患者の状況を理解しておられ、「透析患者は透析することで元気になる。しかし、金がかかることが大きな問題だから、身体障害者の1級にして、更生医療を適応しては」との訴えて頂き、昭和47年10月から更生医療が適応され、安心して透析ができるようになりました。患者のみならずたくさんの方の支援があったことは間違いありません。

### 輸血そして食事療法

今はほとんど必要ないのですが、まだ稚拙な透析器の時代は、透析をするたびに輸血200ccが必要でした。当時は献血をする人がまだ少なく、献血手帳を提示しないと輸血できない時代で、当時の腎友会として、献血を呼びかける運動もしていたこともありました。また、食事についても、人工腎臓だけでは、完全に生身の腎臓のすべてをカバーできないので、食事における

制限が厳しい状況でした。また、水分についても非常に厳しく、水分を取りすぎると体に水分がたまり、そのせいで亡くなる方が後を絶ちませんでした。原因は、透析だけでは、体内に食事等で取り込んだ水分を抜くことが十分できないため、しっかり管理しないと、心臓にまで水分がたまり、心臓に直接針を刺して水を抜く治療が必要となり、この治療は、死と隣り合わせに治療なのです。また、果物や野菜に含まれるカリウムの過剰摂取のため、突然の心停止で亡くなる方も後を絶たず、死と直結している食事療法の当時の厳しさを思い知らされます。その中で、富山赤十字病院には、各地から透析が受けられる病院として、尿毒症患者が殺到し、赤十字病院が、透析を始めてから6か月で満杯となり、あふれた患者のために夜間透析もスタートさせ、ほぼ24時間体制で、可能な限りの患者を助けるべく医師や看護師などスタッフの献身的な努力の中で、多くの患者が救われていったのです。

### 現在の透析

先のような、透析創成期の大変な苦労を経て、腎友会活動は、その改善を追求することを大前提に、様々な間活動をした中で、今の透析治療があります。今の透析は、透析器の改良や技術革新で、水分や老廃物の除去は、かなりの部分まで進み、各自の体に合った選択すらできるようになっています。ただ、透析器だけでは補いきれないものも、薬の技術革新のおかげで、新たにクリアーできたものも多くあります。その中で、輸血が基本的に必要がなくなったことです。腎臓からの分泌されるものの中で、輸血に頼るしかなかったものが、今は、薬で補うことができ、輸血の必要がなくなったり、必ず発症していた透析の副作用もかなり抑えることができたりと、本当に透析による社会復帰をほぼ健常者と変わらない域まで来ています。そういう中で、腎友会は、透析施設の充実や年々増えてくる患者の環境をしっかりと整えるべく、必要な要求をしながら、患者会の大きな組織としての支援（特に災害支援）の輪も広げながら、しっかりと活動をしてきています。

### 今後の腎友会

NPO法人として生まれ変わって約5年。富山県腎友会は、要求するだけの団体ではなく、様々な活動を通じて、社会貢献も併せて進める団体としても、しっかりと活動を進めています。特に、近年増大し、30万人を超えている透析患者をこれ以上、増やさないための活動に、大きな力を注いでいます。慢性腎不全対策として、年1回の県からの委託事業として、富山県内各地でセミナーを実施。薬品メーカーとの共催で年1回、同様のセミナーを開催している。そのほかに、県内数か所で、臓器移植推進キャンペーンに参加して、臓器移植カードの配布等も行っている。ただ、このように活動を進めているが、今後は、会員が増えずに困っている部分もある。透析患者の高齢化、無関心層の増大等があげられるが、先人が苦労して獲得した様々な制度が患者にとって当たり前のことと受け止められ、放っておいても永遠に続くと思われている方もあり、

今で十分だから関係ないとして入会自体しない人が増えています。しかし、今の社会情勢を鑑みると、透析患者が保険制度を破綻させかけている元凶と言われ、とある元アナウンサーのブログに「透析患者を殺してしまえ」と書かれたことがありました。また、診療報酬の見直し毎に、透析医療を圧迫するような改定がなされ、今までできていたことが徐々に厳しくなっていることも事実です。その最たる例は、長時間透析に対する診療報酬の減額が表面化した約10年前、全国にあった夜間透析可能な病院がことごとく、やめたことがありました。社会復帰の治療と言われている透析治療が、夜間受けられないとなると、日中の透析しかできず、会社勤めができる可能性は、奪われてしまいます。その時以来、今では、富山市内、高岡市内以外で、夜間透析できる病院はなく、新川、砺波地区の方々は、夜間透析が受けられない環境になっています。今の財

政難の時代、透析患者に対する風当たりは、強くなってくると思われる。患者会としては、当然、今の環境の後退を許さないという立場での活動はしなければいけないが、そのうえで、様々な社会貢献も模索しながら、「要求するだけの圧力団体」としてではなく、しっかりとした活動を進める団体として、生きていく段階に来ていることも認識しております。世間の皆さんの理解を得られるよう努力していかねばなりません。高岡ロータリークラブの皆様には、我々富山県腎友会の歴史に触れていただきながら、我々腎友会活動の意義をお理解いただき、いろいろな形でのご支援を頂ければ幸いです。

以上

## 親睦麻雀大会 2月8日 開催

健康ランド遊湯 参加者13名



優勝 伏江 努  
準優勝 金森健祐  
3位 室崎 靖

